

「事件」の衝撃と課題

情報公開クリアリングハウス理事 奥津 茂樹



安

倍晋三元首相が銃撃され亡くなった。想定外の事件に日本社会は大きな衝撃を受けた。暴力で人間の命を奪うことは絶対に許されない。情報公開に対するスタンスは異なるが、まだ未来がある政治家の非業の死に対して、心からお悔やみを申し上げたい。未解明な点が多いが、今回の事件は民主主義や情報公開のあり方にも大きく関わる。衝撃の大きさに思考停止に陥るのではなく、事件直後だからこそ事件を冷静に受け止めるべきだろう。そこで、事件を機に考えるべきところを整理した。

民主主義に対する暴挙

事件は参議院選挙期間の最中に起きた。しかも、立候補者の街頭活動の場での銃撃である。現象的にも、これが民主主義に対する暴挙であることは言うまでもない。暴挙とは、その行為が乱暴であることをいう。乱暴とは行為の当事者が一方的であることを指す。

今回の事件の容疑者の動機は未解明だが、報道によれば「特定の宗教団体に恨む気持ちがあった。安倍元首相が（その団体に）近いので狙った」という趣旨の供述をしているという（朝日新聞22年7月8日）。ここでいう「近い」とは何を指すのか、根拠となる事実はあるのか。このように考えると、容疑者が一

方的に恨みを募らせた結果だと思われる。恨みの原因になった私的な事実と、恨みの対象との関係は客観的に証明されていない。そのような個人的で主観的な「物語」は、今回の事件に限らず、さまざまな犯罪の根にあることが多い。

誰もが一方的な思いや「物語」を描くことはある。しかし、多くの人間は他者との対話を通じて、それが独りよがりによる思い込みであることを知る。たとえば、当事者が暴挙を犯す前に、周囲から諭され止められたり、助言を得ることで冷静になり自制する。今回の容疑者は、そうした「対話」のチャンネルを欠いていたと思われる。

最近の犯罪で指摘される「拡大自殺」も同じだ。容疑者の多くは「孤立」の中にあり、一方的な思い込み

の抑制・自制になる「対話」の機会を持っていない。しかも、ネットやSNSの一部に見られる過激な言動が、思い込みを正当化している可能性を否定できない。

そもそも民主主義は「対話」を重視する。今回の事件でも、安倍元首相は聴衆に自身の政治信条を語るうとしていた。その冒頭で放たれた銃弾が、彼の命とともに「対話」を奪い去った。この点で民主主義に対する暴挙なのである。

「対話」の否定という暴挙の本質をとらえると、今回の事件は決して特殊なものではないことがわかる。そして、暴挙は日本の民主主義や社会の至るところにあることに気づくだろう。

背後にある「対話」の欠落

大きな選挙のたびにNHKで政見放送が流される。選挙は民主主義の根幹とされ、これに関する重要な情報ツールの一つとして、政見放送の位置づけは重い。しかし、その重責に比べると、あまりに軽い内容のものが少なくない。さらに荒唐無稽な自説を展開するものもあり、見るに耐えない気持ちになる。

